

主催者でもあり進行係でもある甘木氏が立ち上がって、どなたか御希望の方はありませんか、時間の都合でもう一人だけと会場を見渡す。たった今までそんなことなど思ってもいなかったのに、このまま要領を得ないで終わったのでは仕様がないうじゃないかという気がして、そんな気がしたとたんにもう右手が拳がっていた。

目立ちたくはないが仕方がない。

もともと引つ込み思案のほうで、おおぜいの知らない人の前で何かやるなどということ嫌いだし、それでも催しの雰囲気壊さないようにと一種の律儀さから、ちよつとばかり突出してしまった時には、後で苦々しい後悔の思いを噛み締めるのが常なのだけだ、今夜の場合、人の霊についてそれがあるにせよ無いにせよ、もう少しはつきりしたりり方が出来そうなものじゃないかと少しばかり激した気持ちに底にあった。

「国際精神フォーラム」の「霊能者と語る夕べ」という会合に出席するのは今夜が三度目である。

今までフォーラムに登場した霊能者と称する人は二回共に単独であつたけれど、今夜は女性ばかり五人お揃いの団体であつた。色白で小肥りの優しい顔をした中年のリーダーを先頭に、踵まで隠れる長い黒衣の若い人、驚色の和服の中年、鮮やかな黄色のワンピースの女などとりどりの服装で五人の面々が、満席なので立つて待っている人々を後ろから掻き分ける様に列を作って現れた時は、失礼ではあるけれど旅芸人御一行の到来という感じがした。

霊能という秘密めいた特殊能力を持つと称する人たちを、こうして団体で目の前に見るのは初めてである。

無論、霊能者といつてもとりたてて異相というわけではない。どこでも見かける普通の人たちである。芸人を連想したのはその数と舞台衣装風の派手な彼女たちの服装からであつた。観衆(?)のほうは年配の男性が多くて、そのために会場全体がくすんでいるので、その中に混じると彼女たちの衣装の色は鮮やかであつた。リーダーの純白のスーツがとても立派に見えたが、私は歌手か奇術師以外にはこんな格好の女性を見たことは無い。

腰から下のとても長い黒衣をまとった、舞姫という風情の背の高い女は、のちにリーダーの掛け声に応じてへブライ語(と誰かが云つた様な気がする)か何か、要するに誰にも意味の判らない言葉で懸命に祈り、何事かを告げてみせた。異様に黒目が大きいのが印象的だったが、それが他の四人に共通する特徴というわけでもない。

また一人ははからずも私を被験者として「霊視」をやってみせし、他の二人は希望者二人を前にして、何者かの「お告げ」を猛烈なスピードで紙に書いて見せた。もつともそれが「お告げ」であるとは、私達が勝手にそう思い込んだだけで、それが誰の意思で如何なる意味を持つのか、しかるべき解説があつたわけではない。だから、まあ手相見を傍から眺めているのと大差は無い。

それぞれのメンバーはリーダーの指示で各自の特殊技能を發揮したけれど、Tというリーダー自身は時折何か祈るような仕草をしたり、掛け声を出してみたりするだけで「芸」らしいことは何もしなかった。後で考えればまあ全体の狂言回しというところだったのだろう。

それにしても彼女たちがこれから何をしようとしているのかという説明も、それどころか挨拶さえも抜きで事が始まるというのは随分乱暴な話である。

霊能者として何度かテレビに出演したことがあるというリーダーは、あらかじめ主催者から紹介やら説明やらがあつたと思ひ込んでいたのかもしれないが、私には自分が何者であるかを自分の言葉で語る事が出来ない木偶としか見えなかった。自分たちがやるうとして、ほんのヒントであつてもいいから云えないようでは話にならない。

何をするのか誰にも判らないままに、それでは会場の方でどなたか前に出て下さいというこのリーダーの要請でことは始まった。これが心霊実験だというのは私の思い込みが大仰に過ぎたのであつて、例えば運勢鑑定の類と思えばそれで良かったのかもしれない。

現に私の指名される前に挙手をして進み出た初老の男たち二人はそれぞれ二人の女性と相対して坐り、彼女たちが黙々として何事か書き散らした紙を貰つて、とても読めないと言つながら席に戻つてゐる。もしお差し支えなければ何を書いて貰つたか後で公表して下さいと甘木氏が云う。差し支えも何もんで読めません・・。

五十人ばかりの参加者は、二人の女性が瞑目したまま猛然とボールペンを動かしている間、その情景をぼんやり眺めているだけである。

心霊現象の一つに「自動書記」というのがある。心霊が霊媒の手を使って何かを書かせる。霊媒自身は一種の道具になつてしまつて、書いている内容を知らない。時には学んだことの無い外国語で書くこともあるというが、私はきちんとした実例報告を読んだことは無い。

一体ここで今やられていることが自動書記なのだろうか。見てみると彼女たちは眼を閉じ、紙も文字も全く見ないで懸命に書きとばしているけれど、その右手は他の何者かによつてではなくて彼女たち自身の意思によつて動いている様に見える。とても未知なる何者かに操られているようには見えない。それが余りに歴然としているので「超常現象」に類する出来事を期待していた私には興醒めである。退屈した。

これで終わりというのでは折角来た甲斐が無いと思つてゐると甘木氏が、プライベート

のこともありますけれど、書いて頂いたものを公表してもいいといわれる方はありませんかと言う。甘木氏もこうして手相鑑定みたいなことで終わっては「イベント」として余りに盛り上がり欠けると気にしたようである。誰だって公表を憚るプライバシーはあるだろうが、こんな「旅興行」の余興みたいなことで暴かれるプライバシーなんてたいしたものでもないし、それに仮に事態がそんな風に展開すればむしろ面白いのではないか、心霊実験の会ならその方が望ましいことではないかと思っただ。

私は文献のみで心霊学に接することにはもう飽きており、この眼で「死後の生」あるいは「死後も人の個性は存続するという証拠」を確かめたいと思っっている。

不思議大好きという軽やかな気分はちつとも無くて、ただ「人はその死とともに虚無に帰して一切は空」と考えたくないのである。来世に用意されているものが花咲き鳥の歌う極楽であれかしと望んでいるわけではない。その場が寂寞とした荒野であるうが、極寒暗黒の宇宙空間であるうが何でもかまわれない、とにかく肉体は飛散して個々の分子に還ったとしても人の意識は続いてゆくと考えたいのだ。

リーダーも今度はちと変わったことをと考えたらしく、手を上げた私を招いて黄色い服のの前に座らせた。

四十歳くらいだろうか、無愛想な顔をしてにこりもしない。眼が濡れたように黒い。

「霊視」をすると云う。紙に私の名を書いて女の前に置くだけでいいのだそうだ。女と顔を見合わせて座っていると、突然女が眼を閉じて両手を絞るように握り合わせ、頭上にかざしてわななき始める。リーダーが女の後方から「エイヤツ」と掛け声をかけながら右手を振り降ろすと女のわななきが次第に激しくなって来る。リーダーが声を励まして

「サアサアサア、何が見えますかッ」

女は苦しげに顔を歪めて

「・・・山の中の小さな滝・・・その向うにお寺が・・・」

「サアサア、サアツ」

「お寺に・・・小さな・・・お坊さんが・・・」

何故そうなるのか、そうするのか、理由はさっぱり解からないけれど、女があんまり苦しげに声を絞り出そうとするので、先頃喘息発作で苦しみながら急死した娘が、私の密かに期待していたようにひょっとしたら、この女に「降霊」して来たのかも知れない、という気がして緊張した。しかし、女の吐き出す寺だの坊主だのという途切れ途切れの言葉からは、娘とのつながりは明らかではない。かといって女の描写しようとする風景に一向心当たりも無い。どこかで見たかもしれない山水画を思い浮かべて茫然とするばかりである。リーダーは女の背後から更に催促する。

「エイツ・・・サア何がみえますかッ・・・」

「棺があつて中に・・・髪の毛の長い女が入られている・・・判らない・・・」

棺という言葉にまたはっとしたけれど、娘は高校二年生になつたばかりで髪は長く伸ば

してはいなかった。女はますます苦しげに身悶えして

「アア・判らない、これ以上は判らないツ・」

と大声を振り絞る。リーダーが背中を突ついて何か言っていると女は不意に元の顔に戻った。鮮やかに顔つきが変るところからみると、別に憑依の状態になっていたのでもなくて、何か見極め難いものを強いて見ようとして悶えていたものらしい。

黄色い服の女はリーダーに促されて眼を開けて立ちあがり、先程の「書く女」と交代する。「書く女」は紙に書かれた私の名前を暫く眺めていたが、やおらボールペンを執って私の名前の横から書き始める。瞑目して正面を向いたまま手探りで、紙をめくるのもどかしげに書き急ぐ。全部で洋半紙五枚にもなったが、大きな字なので書き終わるまで五分もかからなかった。私の方は公開して貰って結構という気構えで、紙をそのまま机上に置いて自席に戻る。

甘木氏が紙を取り上げて一瞥して、「とても読めない」と苦笑いするとリーダーが私が読みましょうと言う。平仮名ばかりの続き文字だから初見では私にもとても読めなかったけれど、貰って来た紙をこうしてゆっくり見ているとなんとか読めなくもない。一部を漢字に変えて句読点を入れて書き写してみる。

「この者の心それはくるしんでいる。その苦しみを取り除くことはこの者のこれから起ることの予告。このことはそれはこの者の家を不幸にしてしまうもの。それを取り除かねばこの者はこれから危険なことになってしまう。そのものとは家の東にあるもの。それをよく見よ。それがいままでにもこの家にいるいろいろなことをひきおこしてきたのだ。早く気がつかねばこのものは危険なことになってしまう。」

この者の家につまづること、それはこの者の家の中。家の中のある場所におかれていくもの。それはこの家に古くからあるもの。このことはこの者の心の中にずっとあったはず。そのおそれのためにいままで暗い心になっていたのだ。早くそれを取り除くこと」

リーダーが読み終わっても誰もなんとも云わない。私がどう反応するかがこの場の焦点みたいになっている。私はどうかというと、何にも明らかになっていないと感じて口を開く気にならない。甘木氏が私に尋ねる。

「あなたの家の周りに・何かありますか」

「特に思い当たるものは何もありませんが・。私の家は鎌倉で、山を切り開いた所ですから遺跡の類は周りに沢山ありますが」

座がざわめく。遺跡だとか墓だとかが出てくればなにか納得出来るという雰囲気である。実際、私の家のすぐ傍の谷戸は草地になっていて北條氏の屋敷、常盤亭の跡という高札が建てられている。しかし寺も墓もない。

「家の東はどうですか」

「東は空き地です。分譲住宅地の一角ですが東隣りにはまだなにも建っていません」

「家の中は・・・」

「北から風呂、ダイニングキッチン、増築したサンルームと並んでいます。家の東と言われてもなにも思い当たるものがないですねえ」

皆が思案に暮れるかたちになって少しも弾まないの、責任を感じてなんとか打開したくなる。

「実は今日、私がこの席に出る気になりましたのは先日、家の内に不幸がありまして、五月に娘を亡くしまして苦しみました拳句のことなのです・・・」

再び座がざわめく。苦しんだ拳句ここにやってきて、私は何をしようとしているのか、それをあらためて表明する必要はなさそうである。

「娘さんはいくつでした」

「十六歳でした」

先程の山寺とか棺の中の髪の毛の長い女が、娘の死と一体どう関連するのか尋ねようと口を開きかけると、部屋の向うの隅に座っていた三十歳くらいの女性が突然胸を掻き抱いて苦しみ出す。両隣りの人たちが泣き伏した女性を抱え上げてどうしたの、と訊いているらしいが首を激しく振るばかりで答ええない。そのうちに

「苦しいツ・・・お父さんツ・・・」

と叫ぶ。また座がざわめく。お菓子が欲しいといっているらしく、後ろの席からこれをあげてやっつとチヨコレートが手渡しされて来る気配である。私といえば呆然として立ち尽くす他はない。甘木氏が私に

「娘さんが降霊されたようです・・・傍に行ってあげなさいよ」という。

降霊、これが・・・。満座の視線を浴びて女性の傍にしゃがんだ私は、どう話しかけていいのか判らず当惑し切っていた。つねづね私は娘の霊とほんとうに話すことが出来るなら、まず最初に、彼女のいまわの際に傍に居てやれなかったことを謝らなければならないと思っていた。また一足遅れて駆けつけた病院の救急室で対面した時、既にバイタルサインの総てがネガティブの状況と思いついて、絶望の余りぼんやりしてしまい、必ず娘を蘇生させるという氣力を失い、形式的に心マッサージを試みただけで両手を降ろしてしまつたのではなかったか、手遅れだったという思い込みが強過ぎて、余りに早く諦めてしまつたのではなかったか、もつと頑張ればあるいは蘇生したのではなかったかと、いまさらどうにもならないことなのに、いやどうにもならないことだからこそ、その疑惑を当の「娘」に尋ねようと思っていた。嗤うべし、この迷妄・・・。

もしそうであつたとしたらどうだというのか。娘に対する私の罪の意識は深まるばかりで、まさに絶望的というしかない。しかし、もしそうでないとしても、つまり私は本当に娘を蘇生させる機会も技量も持たなかったのだと当の娘の口から告げられたとしても、私の罪は少しも軽減されはしない。まさに嗤うべし・・・。

しかしながら私は「娘」がどう答えてくれるにせよ、少なくとも答えてくれたことによつて彼女が虚無に帰したのではないと考えることが出来る。虚空に向かつて空しく許しを

乞うのではないと確信出来たら、どれほど気持ちが悪えられることか。

多分ここで私の為すべきことは床に身を投げて、娘よ、お前の早過ぎた死の原因は私にある、あの日の喘息発作を私は余りに軽く見過ぎていた、どうか許してくれとこの見知らぬ女性を掻き抱いて号泣することだったに違いない。それが私のカタルシスになる筈であった。

しかし私にはどうしてもそれが出来ない。

邪魔になって仕方ない私の「理性」はこの場に及んでも理屈をこねている。この女性が一言でいいから、娘と私以外には誰も知らない事実を口にしてくれさえすれば、あるいは百歩譲って、娘の死を私が告白するより前にこの人が憑依の状態になったというのであれば、「娘の降霊」も信じられるかもしれない。確かにチヨコレートは娘の好物ではあった。しかし十六歳の女の子でチヨコレートが嫌いな子は居ないだろう。「胸が苦しい」とか「菓子が欲しい」という表現だけで娘の霊がこの人に「降りた」などとどうして信じられようか。

率直に言えば私には茶番劇はよしてくれ、と云いたい気持ちがある。雰囲気にも呑まれ易い、妙な人が居合わせたお蔭で、私の持つているかもしれない因縁と娘の夭折とがどう関係するのか判らないままに、話が散らばってしまつて迷惑だという気持ちもある。

それに、娘が今に到るも未だ「苦しんでいる」などとどうあつても考えたくない、信じたくない。

私はここでこの女性に語りかける適切な言葉が見つからないまま、それでも突つ立つて見下ろす姿勢にはならないように、小腰を屈めて横顔を覗き込むのが精一杯だった。そんな私から顔をそむける様にして泣きじゃくっていた女性は次第に落ち着いてくる。隣席の人が肩を抱いて大丈夫ですかと問いかけると肯くようになった。この場合、大丈夫かどうかという問答も何か変だけれども、それならばどう云えば善いのだろうか。私は微かに滑稽な感じがする一方、ここに居るのはやっぱり見知らぬ女性であつて「娘」はここには居なかつたと、安心とも落胆ともつかぬ妙な気分ですでだ落ち着かなかつた。

こんな風に大勢の人たちの好奇の眼に囲まれて「娘」と対話するなんて真つ平後免である。

その代わりカタルシスは遂に得られない。

さて、という感じで話が元に戻るかと思つたが、そうはならず「イベント」としては盛り沢山に多彩な情景がいろいろと演出され、ネタはもう出尽くしたという空気がなつた。私としても自分の個人的な心象をこれ以上語るつもりはないし、そうなると「霊視」の解釈にこれ以上時間を費やすのはどうかということになつたらしく、そこいらを片付けたりして何だか店仕舞いの雰囲気である。

そのうちにリーダーが一切は私の演出ですという顔でひとこと何か言っている。本当に

鶴の一声。

「あれは鎌倉時代、部族の争いで焼かれた女が葬られているのです・・・」

あとそれがどうしたとも云わずに眼をパチパチさせている。「見る女」が見たものと「書く女」が告げたことがどう関係するのかやっぱり判らない。

その夜帰宅して寝ようとして気が付いた。

二階の寢室の枕元の小戸棚の上に伊万里焼の赤絵の大皿を飾っていた。貰い物である。二年ほど前に病院の看護婦さんの娘さんの乳腺腺腫を切除してあげたら、御礼だといってくれたものである。あまり立派なのでびっくりしてそれ程の手術じゃあないのにと固辞したけれど、実家が山形の旧家で蔵の中にこんなものはいくらでもあるのだから遠慮するなと勧められて、とうとう頂戴してしまった。江戸時代以前のものだという話だった。

あの時は思い出さなかったけれど、家の中で「東の方にある」「らしい」「もの」といえばこれもそうか。二階のことはすっかり忘れていた。古くから「在る」ものではないけれど、「古いもの」はこれしかない。

娘が喘息で一晩中苦しんだのはこの赤絵を背にしてである。私が宿直で居なかったので、私の布団に娘を移して妻が介抱していたのである。横になると苦しいので一晩中座って喘いでいた娘の背にこれがあった。

見る度に娘を思い出して胸の詰まる気がするけれど、この赤絵に何か因縁があるなどと私自身が考えるようになっては、一切が中世の迷蒙の中に、いや古代の呪術の混沌の中に落ち込むことになるだろうと総てを無視して、そのまま飾ることにした。